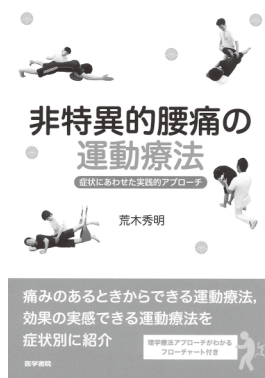


荒木秀明(著)

非特異的腰痛の運動療法 症状にあわせた実践的アプローチ

評者 板場英行

(前・川田整形外科・リハ科診療統括部長)



腰痛は、腰椎、椎間板、椎間関節、神経根、腰部関与筋と軟部組織などの病変が発症原因と考えられている。しかし、臨床的にみると、腰痛の約80%は、医学的診断と臨床症状が一致せず、痛みの原因が特定できない非特異的腰痛である。その意味で、腰痛症例の治療では、診断名や画像所見に固執せず、眼前の対象者から把握できる病態と臨床症状を包括的に評価分析し、的確な臨床推論と臨床判断を駆使した治療介入を行い、臨床考察により治療効果を確認するプロセスが重要である。学際的には、医学モデルに生物・心理・社会的要因に視点を拡充した包括的・多角的・集学的アプローチが強調されている。腰痛の運動療法における近年の動向は、腰部症状に起因した局所基盤治療から、骨盤帯や下肢関節、身体上位構成体との連結、運動機能障害連鎖を考慮したトータルアプローチへと変化している。

このたび、医学書院から荒木秀明著『非特異的腰痛の運動療法——症状にあわせた実践的アプローチ』が発刊された。著者の荒木氏とは、2001年から3年間、徒手理学療法関係の講習会で、ともに講師を務めたことがある。臨床家としての鋭い視点から理論と実技を展開される姿勢に共感したことを覚えている。

自己の治療技術の向上と発展のために、積極的に国内外で臨床研究結果を報告され、整形外科医と激論を交わし、問題解決の糸口を見つけるためには海外渡航も厭わなかった荒木氏が、臨床家としての集大成といえる1冊を執筆された。常に最新の情報を入手し、得た情報を自己実践し、検証する臨床家としての姿勢が

凝縮された腰痛運動療法の指南書である。

本書は5章から構成されている。第1章の序説と第2章の基本的事項を確認した後、第3章から第4章にかけての理学療法的診断学を理解し、治療の中心である第5章の運動療法とホームエクササイズへとページを進める。理学療法評価をベースとした臨床推論、臨床症状に則した臨床判断に基づく治療の展開が、明確に紹介されている。運動療法では、骨盤帯正中化手技、過緊張筋に対する筋リリース手技、深層のコアマッスルに対する積極的安定化運動が、症状にあわせた実践的アプローチとして紹介されている。治療者主体の従来の治療体系から、対象者の自己認知に基づいた自己治療を促進する臨床実践の結果は、国内外の関連学会で報告され、高い評価を得ている。

参考文献232編のうち、日本語文献はわずか2論文である。これらの文献を背景とした付録の各項目を精読し、腰痛治療のエッセンスを理解していただきたい。

荒木氏の長年の臨床に基づいた理学療法評価・診断を臨床で適用するには、相応の時間と各自の研鑽が要求されるが、“腰痛”という巨大な怪物を理解して退治するための、先輩セラピストからのメッセージが込められていると認識し、本書を最大限に活用した臨床実践を構築してほしい。

● B5判, 160頁, 4色刷

定価: 本体 4,200円 + 税

医学書院刊, 2014